

考古アラカルト32

特別展示 桃山文化の陶磁器 ～つちの中から～ 2

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

洛中三条界隈の「せと物や町」

御幸町通と柳馬場通間の三条通に面して、桃山茶陶が大量に見つかった所が四箇所あります。

古くは、享保年間(1716～1736)に屋敷の改修工事の^{うらいけ}おりに、有来家^{うらいけ}の敷地から発見されました。近年では、弁慶石町・中之町・下白山町の調査により出土しています。

1 弁慶石町 土壌から信楽・備前・丹波・伊賀・唐津・志野・黄瀬戸・瀬戸黒・李朝陶器・青花などが出土しました。信楽・備前・伊賀・丹波などの焼締め陶器が多いことが特徴です。水指・花生・四方大鉢・沓茶碗・筒茶碗・大皿・徳利・茶入・香合などがあり、総数は45点を越えます。施釉陶磁器の中で、美濃製品には志野茶碗・向付、黄瀬戸では、茶碗・盃・向付、他に瀬戸黒茶碗や瀬戸茶入・盃・香合・灯明具などが出

土しています。絵唐津の向付・青花徳利・李朝^{かたて}の堅手茶碗などもあります。緑彩のある軟質施釉陶器・サヤ鉢片・窯道具片なども出土しています。

2 中之町 方形の石組遺構・土壌などから出土しました。これらの茶陶を復元可能な3分の1以上の破片で数えると、1500点近くになり、美濃製品が80%を越え、ほとんどのものが美濃元屋敷窯の製品と考えられます。このうち織部が最も多く、次に志野・志野織部・鼠志野・天目茶碗・黄瀬戸の順で、唐津・高取などの九州の製品は約14%で、その他に、信楽・備前・青花などがありました。

東南アジア産のいわゆる「^{なんばん}南蛮」と呼ばれる焼締め陶器の水指の蓋も出土しており、朝鮮のものでは、粉青沙器の壺片があります。京焼と考えられる軟質の施釉陶器もあ

りました。

3 下白山町 複数の土壌から備前・信楽・伊賀・唐津を主に、美濃・瀬戸の製品を含んでいます。三条通の焼物商

これらの出土状況は、三条界隈に桃山茶陶を商う焼物商があったことを物語っています。近年の調査では、裏庭と想定できる位置で、穴に投棄されたような状況で出土しています。一軒の商家が保持するには余りにも多く、これらの茶



三条界隈の桃山陶磁器出土地点

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 弁慶石町 | 中京区三条通御幸町 |
| 2 中之町 | 中京区三条通柳馬場東入 |
| 3 下白山町 | 中京区三条通数屋町上 |
| 4 有来家跡 | 中京区三条通柳馬場東入の中之町 |



三条界隈出土の陶磁器(左:弁慶石町 中:中之町 右:下白山町)

陶は商品として焼物商にあったものが何らかの理由で破棄されたと考えられます。

出土品には使用された痕跡がなく、窯出しの新品に近い状態で発見されています。輪トチン・円錐ピン・三足トチン・ヨリ土など美濃の窯道具が中之町から出土しています。窯道具が付着したままの美濃の製品もあります。窯買いされた焼物が三条界限に搬入され、慎重に窯道具を取外し、仕分けして商品を見定めたと考えられます。

出土資料には、全国各地の焼物産地の製品があり、美濃や唐津の沓茶碗のように産地を超えた共通の意匠を持つものがあります。

今一つ注目されるのは、中国・朝鮮・東南アジアのものが含まれることです。南蛮と称される水指の蓋は、東南アジアで作られたも

のです。南蛮貿易によってもたらされ、洛中に運ばれたのでしょう。三条通の焼物商は、全国にむけて商品を供給する流通の要であったのです。

「せと物や町」の風景

慶長年間（1596～1615）末頃の作と考えられる『洛中洛外図屏風』（勝興寺本）の右隻には三條大橋が描かれ、寺町通と三條通が交差する地点から少し西へ行った南側に、2軒の焼物商の店先が描かれています。この場所は『京都図屏風』に記載する「せと物や町」と考えられ、三條界限の桃山陶磁器の集中出土地点と重なります。『京都図屏風』は寛永元年から3年（1624～1626）の何れかの時点で描かれた近世最古の京絵図です。

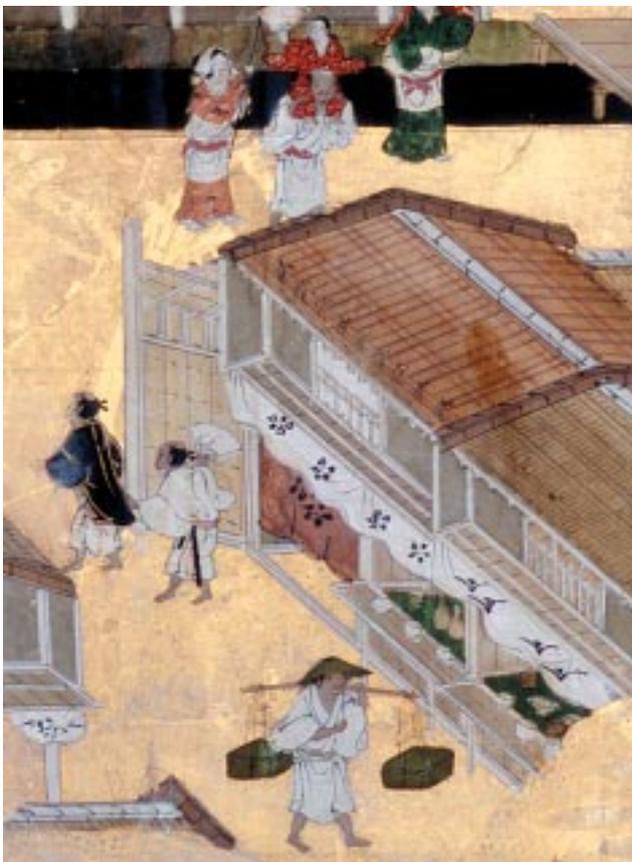
天正の地割りが行なわれた天正18年（1590）以後、寛永元年まで

に「せと物や町」が成立したと考えられます。寛永3年頃に刊行されたとする『都記』にも、「せと物や町」と記されています。慶長期から寛永初年頃が「せと物や町」であり、寛永14年（1637）刊行の『寛永十四年洛中絵図』には「中ノ丁」と記されていて、「せと物や町」は消えています。

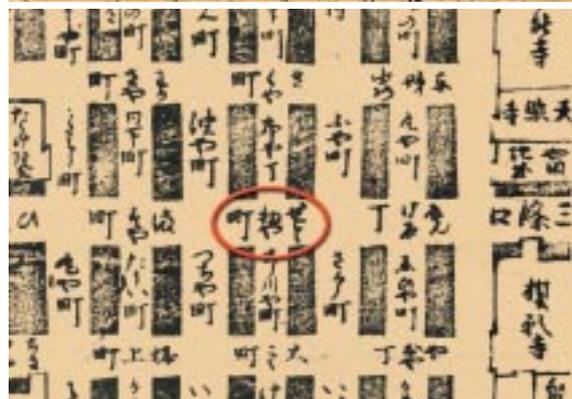
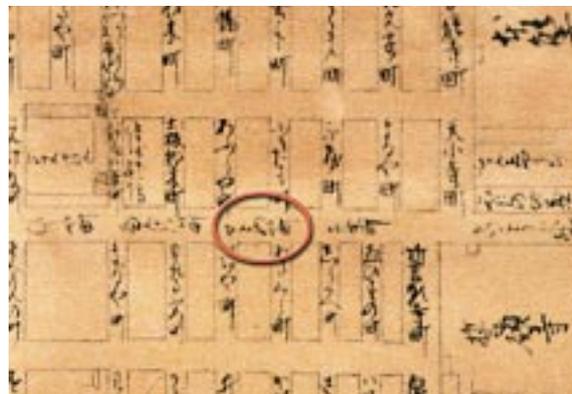
下白山町出土の最も新しい焼物として天啓赤絵といわれるものがあります。青花に簡素な赤絵などを上絵付した皿で、裏面に「天啓年製」と記されています。天啓は中国明朝の年号で、日本では元和7年から寛永4年（1621～1627）にあたります。

焼物を扱う商家が三條界限から消えていくのは、寛永期になってしばらくしてからようです。

（永田 信一）



三條通の焼物屋を描いた洛中洛外図（富山・勝興寺本）



「せと物や町」と記載された京絵図

上：京都図屏風 下：都記
（大塚隆編『慶長昭和京都地図集成より』）